様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ０３６０７

研究課題名（和文）少子化に揺れる東アジアの父系理念－祖先祭祀実践と世界観の再創造に関する比較研究

研究課題名（英文）Changing Patrilineal Ideology across the Declining Birthrate in East Asia: A Comparative Study for the Practice of Ancestral Worship and the Recreation of World View

研究代表者
植野　弘子（UENO, Hiroko）

東洋大学・アジア文化研究所・客員研究員

研究者番号：４０１８３０１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　30,900,000円

研究成果の概要（和文）：少子化が進む東アジアにおける父系理念と祖先祭祀・死後供養の変化について、現地調査・文献研究・アンケート調査を実施し、比較・考察した。対象は、父系社会である韓国、沖縄、中国・台湾（漢民族）、そして父系的な傾向性を持つ日本社会である。
東アジア諸社会の父系的志向はいまだ否定されず、祖先祭祀・死後供養は持続しているが、家族レベルの祭祀・追慕では、父系関係に限らず、死者を媒介にした家族・近親者の相互的関係性が構築される傾向がみられる。各社会の変化には、各々の国家政策・市場・近代化が深く関っている。家族をめぐる大きな変化のなかで、人々は、各社会の社会文化的特性を踏まえて、新たな事態に対応しようとしている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在の日本では、少子化が進み、「家」の存続、墓や位牌の継承が大きな問題となっている。「家」意識は希薄になりつつも、祖先祭祀や親の死後供養を否定はできない。こうした人々の葛藤・悩みは、東アジアに共通するものであり、いまだ行われていなかった他社会との実態を踏まえた比較検討を目指して、本研究は始まった。
父系社会である韓国、沖縄、中国・台湾（漢民族）では、日本と同様に、祖先祭祀・死後供養、そして墓・遺骨の処理に大きな変化が起きている。日本との顕著な差異は、この問題に関する国家の関与・法制化である。我々の社会にふさわしい死後の祭祀のあり方を検討するための比較的視点を、本研究は提供しうるものである。

研究成果の概要（英文）：The changes in patrilineal ideology, ancestor worship and memorial services in East Asia where the birthrate is declining have been researched based on fieldwork, literature research and questionnaire surveys with comparative perspective. The objects are Korea, Okinawa, China/Taiwan (Han Chinese), which are patrilineal societies, and Japan, which has a patrilineal tendency.
The patrilineal orientation of East Asian societies has not yet been denied, and ancestor worship and memorial services continue. In rituals and cherishment for the deceased at the family level, there is a tendency to construct interrelationships among family members and close relatives using the deceased as an intermediary, not just patrilineal relationships.
Changes in each society are deeply related to national policies, markets, and modernisation. In the face of enormous changes in the family system, people are trying to respond to new situations based on the sociocultural characteristics of their own societies.

研究分野：文化人類学

キーワード：父系　祖先祭祀　少子化　葬墓制　家族　親密圏　東アジア　文化人類学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

東アジア諸社会では、非婚化や若年層の貧困化、教育コストの上昇等を背景に、急速に少子化が進んでいる。父系社会とされる韓国、沖縄、中国・台湾（漢民族）において、男性子孫ひいては子孫そのものの不在から、親の死後供養や祖先祭祀の実践、また来世と現世の在り方という世界観の変容を招いている。そして、父系的な傾向性を持った日本社会においても同様の現象が起きている。このように、対象社会の人々は改めて父系理念と向き合い、世界観や親子関係を再構築すべき状況下に置かれている。

だが、それらの具体的な対応に関する東アジア全体を視野にいれた研究は、行われていなかった。そこで、本研究では、少子化による父系血縁イデオロギーに関わる事象の変化において、最も根幹的といえる、死者である祖先とのつながりの再構築の様相に比重をおき、祖先祭祀の実践とそれに関わる世界観について、文化人類学者による共同研究を行おうとした。また、同じく少子化状況にあり、父系的傾斜をもつ双系社会である日本社会を参照事例とし、東アジア全体で少子化が及ぼす今日的課題の考察を試みることとした。

さらに、本研究を通じて、当該諸社会を「父系的」と眼差してきた、従来の人類学研究への批判的検討を行うことも、重要な課題であった。1980 年代から、東アジア親族研究に向けられる男性中心的な研究視点が問題視され、 夫方妻方の双方の親族をつなぐ女性の立場等が指摘され考察された。そして近年、人類学的親族研究全体は、親族よりも家族概念へと関心が移行し、さらに生物学的血縁関係を基盤におく家族・親族関係の見直しが行われている。こうした視点から、東アジアの親族・家族を再考することを目指した。

２．研究の目的

東アジアにおける少子化に伴う父系理念とその実践に関わる変化を、祖先祭祀に着目して分析し、当該社会の人々がこの新たな事態にいかに対応しようとしているのか、今後の展開を視野にいれた考察を行うことが、本研究の目的である。具体的に明らかにしていく課題として、以下を設定した。

（1）父系出自観念に基づく祖先祭祀・死者供養の実践の変化を把握するため「女性」に着目し、女性の祭祀への関与、女性死者への祭祀の実態を分析し、父系理念とジェンダー観の変化を踏まえた理解を目指す。

（2）祖先祭祀・死者供養における、親族・家族以外の関係性あるいは制度の関わりを明らかにしていく。

（3）東アジア諸社会における父系理念ならびに祖先祭祀・死者供養の変化の実態とその特徴を把握し、比較検討を通じて、東アジアに共通する課題、また差異を明確化していく。

３．研究の方法

（1）フィールド調査

研究開始年度である 2018 年度から、研究メンバーは、各自の研究フィールドでの現地調査を行った。しかし、2020 年には新型コロナウィルスの蔓延によって、日本国内も含めて現地調査に困難が生じ、特に海外調査は断念せざるを得ない状況に陥った。海外に渡航しての本格的なフィールド調査は、韓国においては 2022 年から、台湾においては 2023 年から再開することになった。しかし、中国については、調査のためのビザ申請の状況が好転せず、本科研研究期間中にフィールド調査を再開することはできなかった。

（2）文献資料・収集資料の検討

東アジアの父系理念と祖先祭祀に関して、研究メンバー各自が文献資料・調査収集資料の検討を行った。また、研究会においても、「父系出自」、「東アジア各地域における近代以降の社会・政策の変化と親族・家族・祖先祭祀の変化との関連性」をテーマとして、ディスカッションを行うなど、課題の深化に努めた。

（3）若年層に対する祖先祭祀に関するアンケート調査とシンポジウム開催

東アジア諸社会の若年層に対する祖先祭祀に関するアンケート調査（インターネットによる）を、日本(沖縄を除く)、沖縄、台湾、韓国、中国(日本に留学している学生を対象)の大学生・大学院生を対象に、2020 年 12 月から 2021 年 8 月にかけて実施した。質問事項は、基本的に同様であるが、海外の研究協力者の助力を得て、各社会の特徴に対応したものとした。回答者数は、日本 333 名、沖縄 202 名、台湾 761 名、韓国 223 名、中国 33 名であった。このアンケート結果を基に、シンポジウム「東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在―科研によるアンケート調査結果をもとに」（2022 年 7 月 30 日、於：慶応義塾大学三田キャ

ンパス）を開催した。５地域の調査結果の分析報告がメンバーによって行われ、２名の外部コメンテーター、そしてシンポジウム参加者からも有意義なコメントがあり、今後の研究の展開に資する議論が行われた。

（４）シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」開催

本科研プロジェクトの研究活動期間中の集大成として、上記シンポジウム（2024 年１月 27 日、於：東京大学本郷キャンパス）を開催した。「少子化時代の祖先祭祀」「介入/構築される家族」「家族・親密圏の再構築と脱構築」の３セッションに合計９本の報告がなされ、研究メンバー全員が報告者あるいはコメンテーターとして参加した。外部コメンテーター・海外研究協力者のコメンテーター（各１名）からのコメントに加えて、130 名あまりの参加者（ハイブリッド形式による）のなかからも質問・コメントが活発に寄せられ、今後の課題を考察していく有意義な機会となった。

４.研究成果

「少子化」をキーワードとして始められた本科研プロジェクトであったが、研究を進めるに従い、「少子化」に限らない社会の多様な変容が、父系理念や祖先祭祀のあり方に予想外の展開をもたらしていることが明らかとなってきた。そこで、東アジア諸地域間での差異に止まらず、同一地域に存在する多様な諸相を捉えて考察していくことを目指した。以下、言及した研究を主として実施した研究者名は、［　］で示す。

（１）父系出自と祖先に対する多様な評価・対応

①父系出自とその継続性への認識…台湾・中国漢民族社会の若年層へのアンケート結果では、自らの社会を「父系社会」とする者は７割近いが、「祖先」とは誰かとの問いには、母方の祖先をも自らの「祖先」と考える者が半数近くなっており、「父系」観念との矛盾に無自覚であるといえる。また、韓国においても、「祖先のイメージがない」など、父系出自の連続への強い希求が見られない。沖縄においても、「祖先」に関して、「生前を知っている人が祭祀しやすい人」と考えるなど、父系出自、父系の祖先の連続性への認識は、希薄である。他方で、父系出自集団「門中」による墓の共有は維持され、門中成員自身による活動の振り返りが行われている［玉城毅］。中国においても、父系出自集団「宗族」の活動が活発な地域もあり、さらに「中華民族」の統合性の解説に用いられる概念となり、父系理念に基づいた営為は系譜を遡る場面ほど見られるとの指摘[川口幸大]がある。東アジア全体で「父系」理念への希求あるいは実践が減退していると結論づける状況には、いまだ至っていない。

②日本における家督観念と祖先…日本の「家」の継承は父系ではないが、男性を優先して家督継承がなされてきた。これに対して、若年層へのアンケート調査によれば、「代々にわたって家をつないでいかなければならない」とする者は、18.6%に止まるが、そのうち「家を継ぐことになっているのは男性」との回答が62.9%になり、こうした回答をする者は、男性よりも女性のほうが比率が高い。しかし、家の継承の観念がないとする回答は、56.2%に上っている。また、祖先については、「自分の家族とつながりのある昔の誰か」「父方・母方に分けてイメージしない」との回答（複数回答）が半数以上となり、「家」に基づく排他的な祖先観を有してないことは明らかとなっている[田中大介]。つまり、「家」の継承は男性によって行われるという観念を持つ者から、「家」「祖先」にこだわらない者まで、多様な「家」認識が存在している。

（２）祖先祭祀に対する女性の関与とジェンダー観の変化

東アジアの父系親族体系では、女性は婚出すべき存在と考えられており、婚出先で祖先（の配偶者）として祭祀されていくべきであり、未婚で死亡した女性は、行き場のない存在と考えられてきた。

しかし、これまで生家で祭祀されることのなかった未婚で死亡した女性、また離婚によって生家に戻った女性に対する祭祀が生家で行われる例が、台湾の客家社会で見られる。今後、こうした伝統的観念とは異なる慣行の定着の可能性はあるが、これには台湾の政策との関連を留意していく必要がある［三尾裕子］。

婚出した女性がその生家の祖先祭祀あるいは墓参に参加することは、台湾漢民族社会においては、かつては許されざることであった。しかし、近年ではこうした女性による生家での祭祀への参加が見られるとともに、女性による生家の祖先祭祀実践に対する容認は、アンケート結果からも、また現地調査においても確認できる［上水流久彦］。中国・広東省では、若い世代では女性が生家の祭祀に参加している［川口］。韓国においても、祖先祭祀は子女の誰がしてもよい、あるいは娘のみの場合は娘がすればよいという意見は、アン

ケートでは7割を超えている。

祖先祭祀の準備において、祭祀主宰者である男性の妻などの女性に過大な負担が課せられ、これが祖先祭祀への否定的評価につながることが、韓国のアンケート調査またインタビュー調査から指摘しうる[中村八重]。沖縄においても同様の女性の負担があるが、これに対して、長男のみに祭祀継承をさせるのではなく、男女関係なく共同で行うべきとの意見も4割弱になり、男女役割の変化の可能性がみられる[越智郁乃]。

（3）祖先祭祀・死者供養と「親密圏」

死者である祖先、また亡くなった父母に対する祭祀あるいは供養を、人々がいかなる意味を込めて、いかなる人々と共に担っていくのか。現在、東アジア諸社会の家族・親族をめぐる変化を踏まえるならば、祭祀・供養はこれまで機能してきた親族・家族集団に限られるものではなく、また相互関係の構築の場となっていることが、本プロジェクトの諸研究のなかで指摘されている。

韓国では、祭祀・追慕の主たる担い手が家族・近親者であるが、身近な死者の存在や死者に対する記憶・経験が家族・近親者の関係を媒介する資源となっている。つまり、「具体的な他者の生／生命――とくにその不安や困難――に対する関心／配慮を媒介とする、ある程度持続的な関係性」としての「親密圏」[斉藤2003:213]の概念を踏まえて、祖先や死者に対する祭祀が持つ意味を問い直すことが必要であるとの指摘がなされている［本田洋］。

沖縄においては、年中行事や墓において行われる祖先祭祀に参加する若者の比率は高く、祭祀は「親族が集まる機会」「楽しみ」とされ、祭祀・追慕の私事化が、一部の祭祀の再生産につながっている。また、祭祀における女性の負担を軽減し、長男のみに祭祀継承をさせるのではなく、「家族、一族」、男女関係なく「共同」で行うのが望ましいとする志向性がみられる［越智］。

台湾においても、父系的な出自・祭祀の連続というよりも親子間の祭祀の連続性との認識、また娘などの出生女性による生家の祭祀への参加が見られるようになり、祖先祭祀は父系でつながる祖先を義務的に祭祀するという認識ではなく、親密な関係に基づく傾向がある［上水流］。

現在の東アジアの祖先祭祀また身近な死者に対する供養・追慕は、父系的祖先の祭祀を父系子孫が行う伝統的な慣習という解釈では解明できない。祖先祭祀、特に供養・追慕は、いまだに否定されておらず、死者を媒介として、家族・婚姻によって関連する人々がその関係性を再構築していく場、「親密圏」の再構築を視点として考察していく必要がある。

（4）国家・市場・近代化と祖先祭祀

東アジア諸社会の祖先祭祀・死者供養の変化は、国家による規制、市場つまり経済的要素、そして近代的な思想やシステムの関与が複雑に絡み合う様相を呈している。

韓国においては、1980年代から墓地に関する法的規制が強まり、2000年以降の葬送に関する法律の度重なる改正の中で、自然葬や納骨堂が普及していく。今や祭祀の簡素化は合理的なものと理解され、ジェンダー平等意識からは女性の負担への問題意識が生まれる。儒礼に支えられた祖先祭祀はまだ行われているが、祭祀の意味の問い直し、父系血統の再生産への執着の弱まりが見られる［本田・中村］。

台湾でも1983年の墳墓に関する法令以降、2002年に制定された「殯葬管理条例」によって葬墓制の大改革が示され、自然葬・納骨堂の普及が進められていく。人々の観念も変化を見せ、女子による祭祀も当然視され、納骨堂での祭祀を積極的に受け入れている。この状況には、政府による管理のもと、葬儀業・私立納骨堂経営業が深く関わっている［上水流・植野弘子］。こうした政策は、台湾原住民族に対しても同様に適用され、母系親族理念をもつアミ社会においても墓地から納骨堂へと祭祀の場は変化している［西村一之］。また、父系継承者を確保するために行われていた、ブローカーを介して海外から女性を受け入れる国際結婚は、人権問題として批判されたことから法的規制を受けることとなり、激減した。しかし、家族の延命措置としてではなく、ケア労働や親密性を求めて国際結婚は行われており、この変化は、今、家族に求められているものを示している［横田祥子］。

中国本土における伝統的な祖先祭祀・墓制は、新中国成立以降、共産党政府による政策、さらに文化大革命を経て否定され破壊された。しかし、改革開放後の市場経済化、そして中華民族の復興を謳う国家政策によって、「民族の始祖」から世帯レベルの家族までの連続性が強調され、祖先祭祀も伝統文化として評価さ

れることになっている［川口・川瀬由高］。

日本は、祖先祭祀・墓制に関して、国家による規制は非常に弱いといえる。しかし、小家族化・都市化のといった近代的な変化のなかで、死者の祭祀に関わる観念も変化せざるを得ない。この現状に深く関与しているのは、葬儀業や遺骨の処理―墓地・納骨堂・散骨など―に関わる業種などであり、人々の多様な要求に対応している［田中・長沼さやか］。沖縄も同様の状況ではあるが、沖縄の祖先祭祀はより頻繁にしてより広範囲の人々が集まる傾向がある。そして、女性の祭祀継承からの排除と祭祀実施のための女性の負担が、ジェンダー平等観念との関連で課題となっている［越智］。

（5）東アジア諸社会における祖先祭祀の変化に対する比較検討

変容する東アジア諸社会の祖先祭祀の現状について、共通する点としては、まず、父系出自や「家」に基づく祭祀の維持が、家族レベルでは否定的に捉えられている点である。男子だけでなく子供自体が生まれない少子化によって、次世代への継承は確実視できないものとなっている。「祖先」と認識される者も、父系や「家」に限定されず、母方も含んだものとして理解されることが多く、「祖先」の祭祀は、知っている死者への供養・追慕として行われているといえよう。その祭祀の行為者は、父系親族組織あるいは「家」の成員というよりは、家族・近親者が死者への追慕を共にするという持続的相互関係、「つながり」を有する人々といえよう。小家族化とともに、ジェンダー平等意識も、いずれの社会でもその濃淡はあっても見られるものである。女性による祭祀の継承は、選択せざるを得ない手段となり、また祭祀のために女性に多大な負担が課せられることにも批判的意見が顕著であり、今後の変化が予想される。

いずれの社会にも起こった都市化、地域共同体の変化は、祭祀・葬儀執行・遺骨の処理に専門的な職業者の関与を必要とし、従来の慣行は変容せざるを得ない。祖先祭祀・死者供養が、家族・親族の領域に止まらず、外部化することによって実施可能なものへと変質し、市場経済の一端へと組み入れている。

対して、祖先祭祀の現状について東アジア諸社会間の差異として顕著なのは、国家の関与である。特に、日本は他の地域とは異なり、祭祀、墓地・遺骨の処理について、国家としての明確な方針を打ち出すことはなく、法的な規制も他社会と比するならば非常に少ないといえる。韓国・台湾・中国大陸においては、時期は異なりながらも、墓地の整理、火葬・自然葬の奨励、葬祭職業者の資格認定などが行われ、法制の整備も進められている。日本では、国家が私的領域を管理しないという建前もあり、また火葬が早期に浸透し、墓地が国土の有効活用に抵触してこなかったということも、他の地域とは異なる点として指摘しうる。

現在、中国では、炎帝・黄帝を「中華民族の始祖」とし、そこに宗族の始祖が、さらに家族・個人が連なっていく構図が描かれ、「中華民族」の復興が謳われる。また、宗祠、系譜、清明節の祖先祭祀は、伝統文化として評価されている。祖先祭祀や父系系譜観念は、国家統合意識の高揚にも利用されている。

（6）父系理念と祖先祭祀・死者供養をめぐる今後の研究への示唆

本科研プロジェクト研究による新たな視点、そして今後の課題については、以下の点を指摘しうる。。

① 祖先祭祀・死者供養は、家族レベルでは、身近な死者の存在や死者に対する記憶が家族・近親者の関係を媒介する資源となり、ある程度持続的な関係性としての「親密圏」が構成され、維持・実施される状況がうまれている。父系的な持続性は不確定なものとなり、それゆえに関係者がその危機に対処するため、形を変えた追慕を共同し行う。こうした死者との、また死者を介した新たなつながりのあり方を追うことから、死者とのつながりが、現世の人々をつなげることの意味を考察していくことが可能であろう。

② 父系理念は、家族を超えたレベルにおいては、その存在価値は未だ消滅せず、社会集団としての機能を果たし、あるいは国家の統合の象徴として利用されている。この価値を人々がいかに認識し行動しているのか。父系理念や祖先祭祀に対する早急な否定に陥らず、考察を進める必要がある。

③ 前述した家族や祖先祭祀を取り巻く社会環境の変化や近代的観念の導入の下、それぞれの社会の人々は、多様な対応で対処しようとしている。こうした新たな対応を、既存の社会構造の崩壊とみるのではなく、それぞれの社会がもつ社会的文化的許容性のなかでの選択適応であり、再創造ともいうべきものとして捉え、人々の生活実践を踏まえた分析を行っていくことが求められる。

参照文献：齋藤純一 2003 「親密圏と安全性の政治」齋藤純一編『親密圏のポリティクス』ナカニシヤ出版

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計17件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 本田 洋	４．巻 21
２．論文標題 可能態としての共同体 ： 現代韓国社会における「マウル」の想像と実践に向けて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 韓国朝鮮文化研究　https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003989	６．最初と最後の頁 115-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003989	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 越智郁乃	４．巻 312
２．論文標題 特集　日本民俗学の研究動向Ⅱ 死と葬送　イエなき時代からケア概念の導入へ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本民俗学	６．最初と最後の頁 74-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中大介	４．巻 7
２．論文標題 情報産業としての葬儀業：情報化による職能実践と儀礼実践の変容	５．発行年 2022年
３．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集　https://www.ceremony-ri.jp/study-result	６．最初と最後の頁 94-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中大介	４．巻 8
２．論文標題 オンライン葬儀の需要と可能性：情報化による職能実践と儀礼実践の変容（その2）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集　https://www.ceremony-ri.jp/study-result	６．最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中 大介	4．巻 575
2．論文標題 葬儀をめぐる変化と動向の諸相	5．発行年 2023年
3．雑誌名 生活協同組合研究　https://ccij.jp/book/kenkyu_backnumber.html	6．最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57538/consumercoopstudies.575.0_5	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 KAWAGUCHI Sachihiro	4．巻 22
2．論文標題 Mirrors for Oneself: East Asian Kinship Studies in Japan	5．発行年 2023年
3．雑誌名 Tohoku Anthropological Exchange　https://www2.sal.tohoku.ac.jp/anthropology/TAE22_2023.pdf	6．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 令和元年度事業
2．論文標題 現代葬儀におけるケア概念の構築と再生産：葬儀業の専門家システムに関する調査研究の現状と展望	5．発行年 2020年
3．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集　https://www.ceremony-ri.jp/study-result	6．最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 三尾裕子	4．巻 253
2．論文標題 疫病と台湾の民間信仰	5．発行年 2020年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 232－243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 横田祥子	４．巻 54
２．論文標題 家族の行方：台湾の国際結婚	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中国２１　https://aichiu.repo.nii.ac.jp/records/10782	６．最初と最後の頁 237-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 本田洋	４．巻 20
２．論文標題 現代韓国社会における祭祀・追慕実践の諸脈絡	５．発行年 2021年
３．雑誌名 韓国朝鮮文化研究　https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003979	６．最初と最後の頁 41-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003979	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中大介	４．巻 令和2年度事業
２．論文標題 弔いとケアの融合：家族葬、および葬儀業のキャリアパスに関する事例研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集 https://www.ceremony-ri.jp/study-result	６．最初と最後の頁 67-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 植野 弘子	４．巻 25
２．論文標題 日本統治期台湾における墓制への施策 ――台南地域の公報から探る――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 白山人類学　https://toyo.repo.nii.ac.jp/record/13718/files/hakusanjinruigaku25_227-236.pdf	６．最初と最後の頁 227-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34428/00013289	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 本田洋	4．巻 19
2．論文標題 課題としての対照－韓国の「共同体」（コンドンチェ）に関する民族誌的考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 韓国朝鮮文化研究　https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/2003185#.Yk-tDMjP3b0	6．最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 20
2．論文標題 葬儀サービスの質的動向：冠婚葬祭互助会に関する事例研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代宗教　https://www.iisr.jp/journal	6．最初と最後の頁 155-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 4
2．論文標題 葬儀サービスの変化とグリーフ・ケア：ケアと公共性の理念をめぐる新たな動向	5．発行年 2019年
3．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集：葬祭編　https://www.ceremony-ri.jp/study-result	6．最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 本田洋	4．巻 249･250輯合併号
2．論文標題 農村移住を契機とする生き方の転換―現代韓国社会における農村の資源化に関する試論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 朝鮮学報	6．最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中大介	4．巻 3
2．論文標題 冠婚葬祭互助会の事業展開にみる変化と特質：葬儀の標準化と個別化に関する調査研究から	5．発行年 2018年
3．雑誌名 冠婚葬祭総合研究所論文集　https://www.ceremony-ri.jp/study-result	6．最初と最後の頁 130-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計41件（うち招待講演　11件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 MIO Yuko
2．発表標題 Deifying Japanese Spirits of the Dead in Taiwan: A Study of the Intersection between Post-coloniality and Post-imperiality
3．学会等名 The 4th World Congress of Taiwan Studies: Taiwan in the Making（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 上水流久彦
2．発表標題 祖先祭祀における女性の主体化－若年層の意識調査から
3．学会等名 ワークショップ「東アジアと東南アジアにおける高齢者の居住形態の選択」
4．発表年 2022年

1．発表者名 本田洋
2．発表標題 言説と実践としてのマウル-共同体：全北南原の民族誌から（韓国語）
3．学会等名 全北大学校生・米・文明研究院／考古人類学科BK21教育研究団　海外碩学招聘特講（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 地域で看取ることの人類学的考察
３．学会等名 地域デザイン学会第11回全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 地域での集住における看取りのデザイン
３．学会等名 地域デザイン学会・ 地域健康フォーラム2022「地域社会にみられる医療と生活の融合」（オンライン）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 上水流久彦
２．発表標題 台湾：親族の祭祀から家族の祭祀へ
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在―科研によるアンケート調査結果をもとに」
４．発表年 2022年

１．発表者名 川瀬由高
２．発表標題 中国（在日中国人留学生）：観念なし、実践もなし？
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在―科研によるアンケート調査結果をもとに」
４．発表年 2022年

１．発表者名 中村八重
２．発表標題 韓国： 祖先祭祀に対する意識の変化と「祀らない」人々
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在ー科研によるアンケート調査結果をもとに」
４．発表年 2022年

１．発表者名 越智郁乃
２．発表標題 沖縄：楽しみとしての祭祀と継承の困難
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在―科研によるアンケート調査結果をもとに」
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 若年層の祖先祭祀をめぐる規範と選択の重層性
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの若年層にみる「祖先祭祀」の現在―科研によるアンケート調査結果をもとに」
４．発表年 2022年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 きたない死、きれいな死：葬儀業の職能実践にみる死穢観念の現代的様相
３．学会等名 南山大学人類学研究所・社会倫理研究所連携シンポジウム「葬式はどこから来てどこへ行くのか」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 長沼さやか
２．発表標題 エスニック・アイデンティティの多元性：広東省珠江デルタの人々を例に
３．学会等名 2023年度慶応義塾大学東アジア研究所講座「歴史のなかの中国社会：疎外と連帯」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 越智郁乃
２．発表標題 琉球/沖縄における死の文化の創造
３．学会等名 国際日本文化研究センター「コンソーシアムのグリーバルな新展開」 キックオフシンポジウム「日本文明の再構築―岩倉使節団 150 周年に寄せて」パネル「異文化接触と文化創造―古今東西からの岩倉使節団」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 上水流久彦
２．発表標題 新たな祭祀装置としての霊骨塔・自然葬―台湾社会を事例に
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 横田祥子
２．発表標題 国際結婚をめぐる男女と国家―少子化時代の台湾における家族形成
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 川口幸大
２．発表標題 現代中国社会における家族と親族―理念の父系、現実の双系、そしてセーフティネット
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 川瀬由高
２．発表標題 位牌のない祖先祭祀――南京市郊外農村における政治経済的変動と伝統の「復興」
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 本田洋
２．発表標題 現代韓国の祭祀と家族：孤立・流動化する親密圏と個の再帰性
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 中村八重
２．発表標題 なぜ祀りたくないのか―韓国の若年層の祖先祭祀観を中心に
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 玉城毅
２．発表標題 慣習を振り返る人々―沖縄糸満の門中墓とメモリアルパーク
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 越智郁乃
２．発表標題 祖先祭祀を支えるもの：現代沖縄の若年層にみる祭祀継承とジェンダー観
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 弔いとライフデザイン：現代日本の葬儀にみる人生設計の理念とその諸相
３．学会等名 シンポジウム「東アジアの祖先祭祀を問い直す―少子化、父系理念、家族を超える試みから」
４．発表年 2024年

１．発表者名 越智郁乃
２．発表標題 都市の「樹木葬」と「生活感覚」―東京都港区の寺院墓地を例に―
３．学会等名 日本民俗学会第72回年会
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 The Japanese Way of Death: A Brief Depiction of Emotions in Mourning and Funera
３．学会等名 公益財団法人セゾン文化財団　Museum of Human E-motions 2020（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 三尾裕子
２．発表標題 疫病と台湾の民間信仰
３．学会等名 （ウェビナー）「ポストコロナ時代の東アジア」 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院東アジアメディア研究センター（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 林承緯
２．発表標題 魂祭祀設施與異國信仰園區並存共生的可能:以桃園神社遺跡為例
３．学会等名 桃園學研討會（桃園市政府文化局・國立中央大學歷史研究所・日本民俗學會主催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 弔いの文化と技術
３．学会等名 「「技術構成主義」に立つ「生と死」をめぐる倫理の分析と社会的議論の啓発」主催セミナー（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 三尾裕子
２．発表標題 台湾で日本人を祀る－民間信仰・戦争の記憶・観光資源
３．学会等名 駒澤大学宗教学研究会第193回宗教学研究会（公開講演会）（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 死と葬儀の再省察：社会－文化研究の潮流を中心に
３．学会等名 日本葬送文化学会定例会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 地域の看取りをめぐる文化的デザインの構築
３．学会等名 地域デザイン学会地域健康フォーラム2021「地域医療へのZTCAの適用」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 看取りと葬送の変容：死の文化について考える
３．学会等名 文化看護学会第14回学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 三尾裕子
２．発表標題 Social Memory Regarding War Experiences: A Case of Worshiping Japanese Spirits in Taiwan
３．学会等名 The 2nd Annual Conference of the EASSSR（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 上水流久彦
２．発表標題 台湾の少子化と非婚化にみる祖先祭祀の行く末－娘と娘しかいない人々を事例に
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 長沼さやか
２．発表標題 ソーシャル・キャピタルとして家族を問いなおす―日常の互酬と信頼構築を手がかりに―
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 玉城毅
２．発表標題 簡素化する死者儀礼と祖先祭祀：沖縄において死は隠蔽されているか？
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中村八重
２．発表標題 韓国の祖先祭祀はどこへ向かうか－大学生の祖先祭祀に対する意識調査を中心に－
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 三尾裕子
２．発表標題 死後成神的風俗習慣之初歩研究：日本與台湾之比較
３．学会等名 The International Conference of Religion, Violence and Multi-culturalism（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川口幸大
２．発表標題 現代中国における儒教と「宗教性」
３．学会等名 日本宗教学会第７７回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 越智郁乃
２．発表標題 郷友会墓地の60年―沖縄本島都市移住者団体の墓祭祀を例に
３．学会等名 日本民俗学会第７０回年会
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 葬儀業におけるケア産業化の潮流：死と看取りを支える地域ケアの事例研究として
３．学会等名 日本保健医療社会学会第４４回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中大介
２．発表標題 日本における葬儀業の職業実践にみるケア文脈の包摂機制：デス・ワークの専門職化に関する事例研究として
３．学会等名 日本文化人類学会第５２回研究大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計16件

１．著者名 YOKOTA Sachiko	４．発行年 2022年
２．出版社 World Scientific Pub Co Inc.	５．総ページ数 404
３．書名 Yumi Kitamura, Alan Hao Yang and Ju-lan Thung (eds.), When East Asia Meets Southeast Asia: Presence and Connectedness in Transformation Revisited, 担当章名 Marrying out of Indonesia and Global Householding: Chinese Indonesian Women from West Kalimantan across Taiwan and Transnational Chinese Community, pp.231-255.	

１．著者名 玉城毅	４．発行年 2022年
２．出版社 共和国	５．総ページ数 440
３．書名 琉球・沖縄　寄留民の歴史人類学ー移住者たちの生活実践	

１．著者名 田中大介・田代志門	４．発行年 2022年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 408
３．書名 浮ヶ谷幸代・田代志門・山田慎也編『現代日本の「看取り文化」を構想する』、担当章名「「死の研究」の現在：人類学・社会学の系譜から」（3-27頁）	

１．著者名 田中大介	４．発行年 2022年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 408
３．書名 浮ヶ谷幸代・田代志門・山田慎也編『現代日本の「看取り文化」を構想する』、担当章名「COVID-19と葬儀業」（347-367頁）	

１．著者名 川口幸大	４．発行年 2024年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 432
３．書名 河合洋尚・奈良雅史・韓敏編『中国民族誌学―100年の軌跡と展望』、担当章名「親族―中国社会を律する原理の解明に向けて」（59-74頁）	

１．著者名 西村一之	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 280
３．書名 宮岡真央子・渋谷努・中村八重・兼城糸江編『日本で学ぶ文化人類学』、担当章名「信じる―日本社会における祈り」（77-94頁）	

1．著者名 林承緯	4．発行年 2020年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 240
3．書名 東北学院大学 震災の記録プロジェクト／金菱 清（ゼミナール）編『震災と行方不明―曖昧な喪失と受容の物語』　特別寄稿「儀礼文化の伝承は最も確実な災害の記憶装置なのだろうか－台湾雲林県口湖、四湖の牽水状儀式」（203-219頁）	

1．著者名 横田祥子	4．発行年 2021年
2．出版社 春風社	5．総ページ数 256
3．書名 家族を生み出す：台湾をめぐる国際結婚の民族誌	

1．著者名 川口幸大	4．発行年 2021年
2．出版社 法蔵館	5．総ページ数 420
3．書名 長谷千代子・別所裕介・川口幸大・藤本透子編『宗教性の人類学－近代の果てに、人はなにを願うのか』担当章名「儒教と祖先祭祀に見る現代中国の「宗教性」」（112-142頁）	

1．著者名 三尾裕子編著	4．発行年 2022年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 384
3．書名 台湾で日本人を祀るー鬼（クイ）から神（シン）への現代人類学	

1．著者名 川瀬由高	4．発行年 2019年
2．出版社 弘文堂	5．総ページ数 306
3．書名 共同体なき社会の韻律―中国南京市郊外農村における「非境界的集合」の民族誌	

1．著者名 田中大介	4．発行年 2019年
2．出版社 青土社	5．総ページ数 246
3．書名 現代思想　第47巻第6号　担当章名「多死社会」（139-141頁）	

1．著者名 川口幸大	4．発行年 2019年
2．出版社 風響社	5．総ページ数 352
3．書名 杉本良男・松尾瑞穂編『聖地のポリティクス―ユーラシア地域大国の比較から』、担当章名「「中華聖地」と「我々の聖地」に見る現代中国の政治、宗教、親族―炎帝黄帝陵から祖先墓まで」（291-310頁）	

1．著者名 田中大介	4．発行年 2019年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 304
3．書名 関谷雄一・高倉浩樹編『震災復興の公共人類学―福島原発事故被災者と津波被災者との協働』、担当章名「震災とデス・ワークー葬儀業による死後措置プロセス支援の展開」（263-298頁）	

１．著者名 林承緯	４．発行年 2018年
２．出版社 玉山社	５．総ページ数 395
３．書名 台湾民俗学的建構―行為伝承、信仰伝承、文化資産	

１．著者名 李華	４．発行年 2018年
２．出版社 韓国学中央研究院出版部	５．総ページ数 179
３．書名 李華・許明哲・金炳善著『中国東北地域朝鮮族の人生儀礼と風習』（ハングル）担当章名「中国東北地域朝鮮族の人生儀礼」（18-94頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東アジアにおける祖先祭祀に関するアンケート調査結果
https://www.pu-hiroshima.ac.jp/p/kamizuru/anke-tokekka.html

研究発表
田中大介、2021、「COVID-19と葬儀業」、ケアの人類学研究会2020年度定例会、　オンライン。
上水流久彦、2021、「少子化・現代化のなかの祖先祭祀～台湾を事例に」、「東アジアの高齢者の住まいと居場所―アタッチメントとディタッチメントの両面に注目して」第２回研究会兼第４回「ベトナムのケア研究会」、京都産業大学。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	三尾　裕子 (MIO Yuko) (20195192)	慶應義塾大学・文学部（三田）・教授 (32612)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	上水流　久彦 (KAMIZURU Hisahiko) (50364104)	県立広島大学・公私立大学の部局等（庄原キャンパス）・教授 (25406)	
研究分担者	横田　祥子 (YOKOTA Sachiko) (80709535)	滋賀県立大学・人間文化学部・准教授 (24201)	
研究分担者	西村　一之 (NISHIMURA Kazuyuki) (70328889)	日本女子大学・人間社会学部・教授 (32670)	
研究分担者	川口　幸大 (KAWAGUCHI Sachihiro) (60455235)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	
研究分担者	長沼　さやか (NAGANUMA Sayaka) (80535568)	静岡大学・人文社会科学部・教授 (13801)	
研究分担者	川瀬　由高 (KAWASE Yoshitaka) (60845543)	江戸川大学・社会学部・准教授 (32518)	
研究分担者	本田　洋 (HONDA Hiroshi) (50262093)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	中村　八重 (NAKAMURA Yae) (00769440)	東亜大学・人間科学部・客員研究員 (35503)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	玉城　毅 (TAMAKI Takeshi) (10507312)	奈良県立大学・地域創造学部・教授 (24602)	
研究分担者	越智　郁乃 (OCHI Ikuno) (10624215)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	
研究分担者	田中　大介 (TANAKA Daisuke) (20634281)	自治医科大学・医学部・教授 (32202)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	林　承緯 (LIN Cheng-wei)		
研究協力者	林　慶澤 (YIM Kyung Taek)		
研究協力者	李　華 (LI Hua)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

中華民国（台湾）	国立台北芸術大学			
韓国	韓国外国語大学校	全北大学校		
中国	延辺大学			